霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第108号
平成25年10月1日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

平成27年（2015）執行の「高野山開創1200年記念大法会」での落慶に向けて再建が進められている『中門』

利用案内

開館時間
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

第108号　目次

秋期企画展のご案内……2～3
収蔵品の紹介82……4
高野山の古建築 第十二回……5
福岡市指定文化財・入定寺所蔵「絹本著色不動明王二童子像」・「愛染明王像」について……6～9
霊宝館からのご案内……10～11
霊宝館の庭園……12

平成25年度 秋期企画展
「徳川家と高野山」
9月28日（土）～12月15日（日）

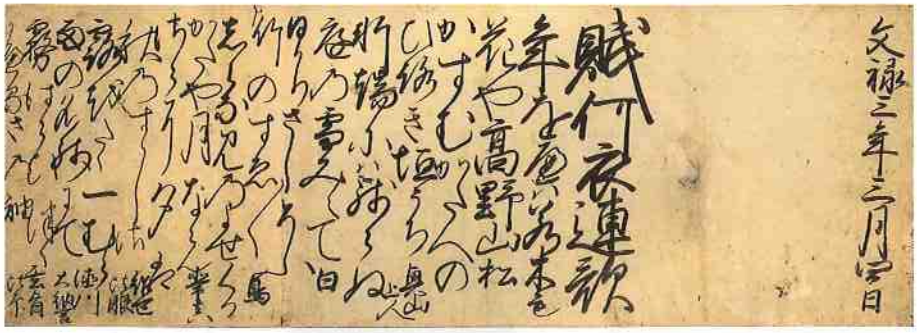
関西文化の日に協賛し、11月11日(月)を無料拝観日とします

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

平成25年度 秋期企画展

「徳川家と高野山」

期間 平成25年9月28日（土）～12月15日（日）



和歌山県指定　文禄三年連歌懐紙

武田勝頼妻子像

重要美術品　豊臣秀吉像（9/28～11/4展示）

千二百年の歴史の中で、高野山は荒廃と再興を繰り返しつつ、現在に至ります。時の権力者が移り変わっても、その度に高野山は弘法大師信仰の下、彼らの庇護を受けてきました。

およそ二百五十年続いた江戸時代、徳川家と高野山のつながりを示すのは、初代将軍家康・二代秀忠を祀る「徳川家霊台（重文）」だけではありません。本展では、高野山に伝わる徳川家ゆかりの品々や、山内各所に現存する遺構をご紹介いたします。江戸時代の高野山に思いをはせ、往時の空気を感じてみて下さい。

またこの度、通常拝観では公開していない徳川家霊台の霊屋内部の特別公開（10月12日～20日）もあわせて行います。（詳細は11頁参照）

主な出陳品

■彫刻

未指定　束帯像（徳川家康像）　金剛峯寺

■書跡

国　宝　金銀字一切経　附漆塗経箱　金剛峯寺

和歌山県指定　文禄三年連歌懐紙　安養院

徳川家康書状

徳川宗将奉納状

観音菩薩像（徳川綱吉筆）

真田幸村像

獅子図（狩野常信筆）

未指定　徳川家康書状　清浄心院
未指定　徳川家綱筆跡　宝寿院
未指定　徳川宗将奉納状　金剛峯寺
未指定　徳川慶喜公大書一行　金剛峯寺
未指定　南龍院（紀州藩初代頼宣）書簡　宝寿院

絵画

重要美術品　豊臣秀吉像　蓮華定院
未指定　獅子図（狩野常信筆）二幅　金剛峯寺
未指定　観音菩薩像（徳川綱吉筆）　金剛峯寺
未指定　家康公三河十六将伝記図　金剛峯寺
未指定　武田晴信（信玄）像　持明院
未指定　武田勝頼妻子像　持明院
未指定　真田昌幸像　蓮華定院
未指定　真田幸村（信繁）像　蓮華定院
未指定　高野山内絵図　金剛峯寺
未指定　大徳院絵図　金剛峯寺
未指定　東照宮指図　金剛峯寺

工芸

未指定　三葵紋入方形香炉　金剛峯寺
未指定　三葵梅花蒔絵椀　金剛峯寺
未指定　葵紋長持掛　金剛峯寺
未指定　仏涅槃像（徳川家綱奉納）　金剛峯寺
未指定　孔雀文磬　蓮花院
未指定　本坪鈴　桜池院

考古

未指定　徳川家霊台鎮壇具（輪宝・橛）　金剛峯寺

全42件を展示。
うち国宝1件、和歌山県指定1件、重要美術品1件。

収蔵品の紹介 82

三葵紋入方形香炉

江戸時代（17～18世紀）

金剛峯寺蔵　銀製　一基

縦 9.9 cm　横 12.5 cm　高 7.3 cm

本品は香を焚く時に使う、銀製の小さな箱です。内部を見ると使用された痕跡がありますが、表面は鏡のようにピカピカです。全面に唐草文様が施され、一面には徳川家の三つ葉葵紋が、その裏面には桜縁巴紋が彫りあらわされています。この桜縁巴紋は尾張藩（現在の愛知県）第三代藩主・徳川綱誠（つなのぶ・つななり、一六五二～一六九九年）側室で第六代藩主継友の生母・泉光院和泉（生没年不詳）が使用していた紋で、このことから香炉の持主も泉光院和泉だろうと推測されます。いかにも女性の持ち物らしい、丸みを帯びた優雅な香炉です。

本品を収める箱には、奉納の経緯が詳細に記されています。箱の蓋裏にある墨書によると、泉光院に仕えていた寿照院という女性によって、泉光院の菩提を弔うために勢州桑名（現在の三重県桑名市）にある大福田寺を介して奉納されたことがわかります。さらに箱の表書には高野山善集院の隆鍾という僧が伽藍御影堂に奉納したと記されています。

つまり、尾張徳川家の泉光院和泉が愛用していたとみられるこの香炉は、和泉→寿照院→大福田寺→善集院隆鍾→御影堂、と多くの人の手を渡って高野山にもたらされ、現在霊宝館に収蔵されていることになります。なお、大福田寺は愛知県に隣接する桑名市に現存し、聖天を祀ることで知られます。

紀州藩の領地に接する高野山には、紀州徳川家ゆかりの品が数多く伝わっていますが、尾張徳川家に関連する遺品は少なく、また詳しい伝来がわかることでも本品は貴重なものです。

（F）

正面

裏面

連載

高野山の古建築

第十二回 県指定文化財 金剛峯寺大主殿（二）

鳴海 祥博

大広間の全景　中門から西を見る。54畳敷きの大広間で、金碧障壁画や高い天井に、格式の高さが表われている。写真正面の襖の奥は「角の間」である。

中門と大広間の南広縁の全景　大主殿の南側には、広々とした板敷きの縁側が設けられている。右手の板敷きの間が大広間へ至る「中門」である。

上段の間の全景　正面は床が一段高くなった「上段」、その左手は更に一段床が高く「上々段」となる。上段の右手に「帳台構え」という独特な形式の出入り口がある。

大主殿の平面図

総本山金剛峯寺は、高野山内のみならず、宗派を統括するお寺です。四脚門や築地塀で囲まれた敷地の中の建物は、大建築で威厳に満ちています。

高野山内にある寺院はすべて、弘法大師の開いた密教修行の地「高野山」に集まった修行僧達の住まいがその起源です。この総本山金剛峯寺も、建築的には住職である「座主」の住居、つまり住坊の姿を伝えています。

正門である四脚門を入ると、正面に見えるのが大主殿です。それは賓客を迎え入れる「晴れ」の座敷、「客殿」です。その右手には客人を迎える「玄関」が建ち、更にその右手には客人をもてなすための食事を用意する「台所」が建っています。住職の日常の住まいは大主殿の奥に張り出して建てられています。

このように大主殿（客殿）と台所が並び建ち、その間に玄関を配置する建物の構成は、格式や規模の差はあっても高野山の寺院に共通するとても特徴的なものとなっています。

では玄関から大主殿に昇殿してみましょう。ただし、この玄関は住職である座主のほかには皇族や高僧、国賓などごく限られた人しか通れません。一般の参詣者は台所の方から大主殿に向かいます。

玄関の奥、台所と大主殿を結ぶ渡り廊下の部分を高野山では「中門」と呼んでいます。それは平安時代の寝殿造りで出入り口を指す言葉で、とても興味ある呼び名です。つまり中門から入る「大主殿」は寝殿造りの中心建物「寝殿」に起源があることを暗示させるのです。さらに「主殿」という言葉も、寝殿の系譜を引き継いだ建物の室町時代の呼び方なのです。大主殿は高野山の長い歴史を受け継いでいるに違いないのです。

大主殿の正面南側には、金碧障壁画で飾られた五四畳敷きの大広間と、その西に一八畳敷きの「角の間」、その西端に一二畳敷きの「柳の間」が連なっています。

大広間と角の間は襖で仕切られていますが、儀式の際には七二畳敷きの一室として使うことも出来ます。種々の儀式や仏事のための最も晴れがましい空間となっています。

角の間の北には二七畳敷きの「上段の間」と、九畳敷きの「上段」が連なり、三畳敷きの「上々段」が西に張り出しています。上段の間は幅三間の「大床」と「違い棚」「付け書院」「帳台構え」が設けられています。これらは「書院造り」としての最も格式のある構えです。そして襖と壁は一面に金箔張りで燦然と輝いています。天井を見ると、角の間から上段の間、上段そして上々段へと、竿縁天井、格天井、小組格天井、彫刻入り格天井と、次第に意匠や贅を尽くし、格式を高め、賓客を迎える巧みな演出が施されています。

大広間から上段の間にかけて、ここには、最高の技術と意匠と財力が注ぎ込まれ、山内随一の儀式と接客のための空間が造り上げられているのです。

福岡市指定文化財・入定寺所蔵「絹本著色不動明王二童子像」・「絹本著色愛染明王像」について

福岡市文化財保護課　水野　哲雄

はじめに

平成二十二年度の福岡市指定文化財十一件のうち、表題に掲げた絵画二件は調査の過程で江戸時代に高野山より現在の福岡市へもたらされたことが明らかとなりました。この度ご縁がありまして、この『霊宝館だより』において高野山をはじめ全国の皆様に両像をご紹介させて頂きますことに、まず感謝申し上げます。本稿では初めに両像の写真と概要を掲げ、続けて福岡市指定文化財としての位置づけについて説明を加えて参ります。

（一）絹本著色不動明王二童子像　一幅

■法量　縦 104.0 cm　横 46.7 cm
■構造・材質　絹本著色　掛幅装　一副一舗
■制作時期　南北朝期（14 世紀中期）

参考地図

（二）絹本著色愛染明王像　一幅

■法量　縦 104.1 cm　横 57.7 cm
■構造・材質　絹本著色　掛幅装　二副一舗（向かって左から 18 cm、39.7 cm）
■制作時期　南北朝～室町初期（14 世紀後期）

写真①　松見山入定寺

1　入定寺の沿革と調査の経緯

松見山入定寺は福岡市博多区上呉服町に所在する真言宗寺院です（写真①）。開山の僧を唯心院圓心と言い、『筑前国続風土記』以下の近世の地誌類、『入定寺記録』『入定寺縁記』（共に入定寺所蔵）によれば、圓心は摂津国伊丹の出身で黒田（加藤）一成の親族でした。黒田一成は江戸時代初期に活躍し、黒田家の筑前入部後には朝倉郡三奈木周辺の一万六千石余を知行した福岡藩の重臣です。圓心は天正年間に駿河に赴いて徳川家康の知遇を得、慶長年間に縁故を頼って筑前へ下向、現在の入定寺の境内に存在した自性院という小庵に居住したと伝えられています。慶長十三年（一六〇八）に圓心は二七日の断食の後に入定、その遺跡に元和七年（一六二一）に黒田長政によって寺院が建立されたのが入定寺の草創です。長政からは那珂郡犬飼村で十石の寺領を与えられ、これは幕末に至るまで継続されました。また福岡藩主黒田家の菩提寺で、同宗派の東長寺とは関係が深く、黒田忠之の代には当寺も黒田家の祈願所に指定されました。三奈木黒田家の一族も歴代当寺を信仰し、現在寺には宝永六年（一七〇九）に黒田一利が寄進した圓心入定図が残されています。また安政四年（一八五七）には圓心の二百五十年忌の法要が、三奈木黒田家の一族を迎えて行われました。入定寺の本尊は石造地蔵菩薩坐像で圓心入定の姿を写したという伝承があり、永らく秘仏とされていました。また境内には平成十七年度に福岡市有形文化財に指定された銅造弘法大師坐像が存在します（写真②）。この銅像は江戸時代の博多で活躍した鋳工、いわゆる「博多鋳物師」の作例として福岡市の金工史上大変重要です。

平成十七年（二〇〇五）の福岡西方沖地震の際、入定寺本堂の被害が大きかった為に本堂安置の仏像について、福岡市教育委員会へ被害状況の確認依頼がありました。また同時にこれまで一般に公開していなかっ

写真②　銅造弘法大師坐像

た所蔵絵画類についても調査を行うこととなり、本稿でご紹介する両像を含む絵画類が改めて確認されました。

2 像容

不動明王二童子像の像容は青黒い体色の不動明王が右手に倶利伽羅剣を、左手に索条を持し、火焔を背負って海中の岩座に立ちます。容貌は左肩に弁髪を垂らし、左目を半眼として右目を大きく見開き、口蓋左端には牙を覗かせるという、不動十九観に基づいたいわゆる円心様の系統に属する画像です。円心様の通例に従い、本像も矜羯羅・制多迦の二童子を従える三尊形式をとります。明王左前に位置する矜羯羅童子は左脇に独鈷杵を挟み胸前で合掌し、上目遣いで頭上の明王尊容を見上げます。右前に位置する制多迦童子は右手に金剛棒を持し、左手で肩衣の右肩を捲り上げて左前に向かい強い視線を投げます。不動の衣文に肥痩線を用い、また背景の火焔を描く技法や写実性に鎌倉仏画の特徴をよく備えますが、画像の作成年代は鎌倉末から南北朝期にかけての十四世紀中期に想定されます。

愛染明王像の像容は獅子冠を戴き、髪を逆立て口を大きく開いて憤怒の相を浮かべた愛染明王が、日輪の中、蓮台上に結跏趺坐します。通例通り本像の明王も一面三目六臂の姿に描かれ、左右の第一手に金剛杵と金剛鈴を、左右の第二手に弓と矢を、右の第三手に蓮花茎を保持し、左の第三手は顔の高さで掌を上に軽く握る形をとりますが、持物は確認することが出来ません。蓮台の下方は宝瓶が支え、その表面には雲龍紋が、宝瓶の左右には瓶から溢れ出した宝珠が火焔に包まれて散る様が描かれています。日輪や蓮弁の輪郭線は截金を、明王の毛髪、蓮花の葉脈、衣服や火焔、宝瓶の紋様線などは金泥で表現します。鎌倉仏画の技法を用いて描かれていますが、全体としてやや定型化した標準的な図様の愛染明王像であり、作成年代は不動明王二童子像よりやや下がり、十四世紀後期と考えられます。

3 伝来の過程

不動明王二童子像の伝来については、裱背貼紙墨書銘により明らかとなります（写真③）。これによれば、本像は本来高野山正智院の重宝で弘法大師作との伝承がありました。しかし寛永十年（一六三三）八月に正智院の大檀主である福岡藩主黒田家の祈祷のために、院主応運法印から、福岡吉祥院の永遍法印へ授与されました。

■裱背墨書銘

「右此本尊者　大師御筆雖為院家重寶、
奉為　大檀主御祈祷、令授與吉祥院永遍法印者也、
寛永十癸酉年八月廿八日
高野山金剛峯正智院
権大僧都法印應運（花押）」

写真③　不動明王二童子像裱背貼紙墨書

福岡藩主黒田家と高野山正智院、福岡吉祥院の関係を確認しておきたく思います。地誌等によれば吉祥院初代院主の尊秀法印は、筑前入部以前から黒田長政の側近くに仕える真言僧でした。黒田氏の筑前入部後は福岡城の地鎮修法や城内祈念櫓で折々の祈祷修法を行い、慶長十三年の警固大明神社創建に際しては同社の別当職に任ぜられ、住坊を吉祥院と称しました。警固大明神社は福岡城下の鎮守として崇敬され、吉祥院は警固大明神社の隣、現在の福岡市中央区天神の警固公園の敷地に存在していました。また尊秀法印は長政からその学識を評価され、嗣子万徳（後の二代藩主忠之）の教育を委ねられたことが知られます。忠之は真言宗に帰依し、後に東長寺を復興して臨済宗崇福寺と共に黒田家の菩提寺とすることになります。

一方、高野山正智院は十二世紀初期に創建されたという高野山の有力な院家の一つでした。近世には福岡藩主黒田家の高野山における菩提所となったほか、近世正智院の主要な檀那には越後村松藩堀家、丹波山家藩谷家、紀州藩主徳川宗将とその一門等がありました。正智院と黒田家の間に師檀関係が取り結ばれた時期や経緯は明確でありませんが、承応三年（一六五四）の黒田忠之の葬儀や忠之の一・三・七の周忌には正智院僧を東長寺へ招いて法要を行い、それ以降の忠之の周忌や三代藩主光之の周忌等では、黒田家は特に藩士を正智院へ派遣して法事を執行させています。また幕末に至るまで、藩主やその家族が死去した場合には遺髪が正智院に納められていました（『新訂黒田家譜』）。福岡藩から正智院に対しては年毎に扶持が支給され、幕末慶応年間の高は米五十石と銀十枚でした（『黒田三藩分限帳』「慶応分限

帳」）。

裱背墨書銘に見える権大僧都法印応暹（正保四年（一六四七）寂）は正智院二十七代の院主で、「正智院文書」や「高野山文書」所収の史料からその活動を追うことが出来ます。寛永十年八月は、黒田忠之が重臣栗山利章から江戸幕府に謀反の訴えを起こされ、幕府において裁定が下された著名なお家騒動、いわゆる「黒田騒動」の直後に当たります。銘文にあるように本像は黒田家の為に修される何らかの祈祷の本尊として用いられました。一般に不動明王が檀主の安穏無事を願う息災法や敵を降伏滅亡させる調伏法の本尊とされたことを考えあわせれば、本像の授受の背景に当該期の黒田家をめぐる政治的状況を類推することも可能です。

不動明王二童子像と同じく、愛染明王像の伝来についても裱背貼紙に墨書で記載されています（写真④）。それによれば本像は元来高野山正智院の什物で、詫摩派の絵仏師の作という伝承がありました。宝暦十二年（一七六二）四月に正智院主凌空から福岡吉祥院へ寄附されています。墨書銘に見える凌空（明和三年（一七六六）寂）は正智院三十六代の院主で、「高野山文書」所収史料等からその存在を確認することが出来ます。

正智院旧蔵の両像を譲り受けた福岡吉祥院は明治元年に廃寺となり、院主は還俗しました。同院に所蔵されていた仏教関連の文化財も、基本的には散逸してしまったと考えられます。吉祥院以外にも、現在入定寺には旧藩時代に藩内で高い格式を持ちながら、やはり明治初年に廃止された真言宗龍華院の什物も一部伝来しています。両像を含め、これらの文化財が入定寺へ移された経緯は史料上確認できず、また入定寺に口碑も残っていません。しかし同時期に筑前住吉宮の別当寺である真言宗円福寺の仏像仏具類が、福岡藩庁の指示を受けて同宗の堅粕東光院（現福岡市博多区）に移された事例（『福岡県史』通史編 福岡藩 文化（上）六三二頁）等を参考にすれば、宗派の繋がりを背景にそれぞれの真言宗寺院の重宝の一部が入定寺へ移管された可能性が高いと考えられます。

写真④　愛染明王像裱背貼紙墨書

■裱背墨書銘
「愛染明王尊像詫摩之筆
寄附于筑陽福岡吉祥院者也、
寶暦十二壬午年四月日
高野山
正智院凌空（花押）」

おわりに

以上、本稿でご紹介した二幅の絵画は福岡市域に所在する仏画類、特に東長寺その他の市内真言宗寺院に所蔵される仏画類と比較しても古い時期の作例に属し、その筆法や画風において鎌倉仏画の特徴をよく示す点で貴重な密教絵画です。銘文により、近世に両像が高野山正智院から福岡吉祥院にもたらされたという伝来の過程が明らかとなり、福岡藩主黒田家の真言宗帰依とそれに伴う宗教儀礼の在り様の一端を窺い知ることが出来ます。吉祥院をはじめ、福岡龍華院や博多大乗寺、紅葉八幡宮別当の西光寺や住吉宮別当の円福寺等、旧藩時代高い格式を持ちながらも明治初年の神仏分離の流れの中で衰退廃絶した福岡城下周辺の真言宗寺院は数多くあります。そのような経緯を踏まえれば、吉祥院から入定寺へ移されて現代まで伝世した両像には美術史的な意義のみならず、歴史的にも重要な意義が与えられます。また、より普遍的な視点に立てば、前近代の信仰を媒介とする多様な歴史的経緯の中で、高野山や同様の宗教的中心地から遠隔地の各地方へと伝播した貴重な文化財が多くあることが予測されます。そのような文化財の存在を明らかにして情報を共有し、保存に向けて努力することは地域で文化財保護を担当する職員の重要な責務の一つであると考えられます。

【参考文献】
高野山霊宝館編『高野山正智院の歴史と美術』（一九九八年）
山本信吉編『高野山正智院経蔵史料集成一　正智院文書』（吉川弘文館、二〇〇四年）

＊追記1　両像の調査と指定に際しては福岡市文化財保護審議会委員（美術史）の井手誠之輔先生（九州大学大学院人文科学府）のご指導を仰ぎました。また入定寺ご住職清原宗鴻様やご家族の皆様には種々のご配慮を賜りました。文末ながら記して感謝を申し上げます。

＊追記2　本稿は社団法人歴史と自然をまもる会刊行『ふるさとの自然と歴史』三四二号（二〇一一年）に発表した原稿に一部加筆訂正したものであることをお断り致します。

高野山霊宝館からのご案内

◎第8回高野山霊宝館もみじ祭

○フォトコンテスト

テーマ「高野山の見どころ」

応募期間

平成25年11月1日(金)～30日(土)

当日消印有効

応募要領

①A4版（21×29・7㎝）にプリントされた作品。プリント紙の種類は問いません。

②撮影場所とその写真に関するコメントを二百字程度で添えてください。

③作品の裏側に天地がわかるように上端に「上」と記載し、住所、氏名を明記してください。（電話番号、年齢は任意）

④応募者一名につき、一点の応募となります。

⑤応募写真の著作権は作者に帰属しますが、当コンテスト及びその他高野山内での展示、広報のポスター、チラシ等への無償使用権が当館に帰属しますので、ご了承ください。

⑥人物を被写体として撮影し、個人が特定される場合は、必ずご本人に当コンテスト応募の旨の承諾をいただいてください。

⑦応募写真は応募者自身が撮影したものに限ります。

⑧過去に写真コンテスト等に応募した作品、またその他コンテストとの二重応募はご遠慮ください。

⑨応募写真は返却できませんので、ご了承ください。

昨年の入賞作品

フォトコンテスト応募先・お問い合わせ先

高野山霊宝館「フォトコンテスト」係　電話0736・56・2029

〒648―0211　和歌山県伊都郡高野町高野山306

○長谷川智弘作品展 結びの世界「みやび」を開催

結びは紐と紐を結び、ひいては人と人を結びます。また、それぞれの結び方には深い意味があります。仏教においては、結びは仏と人を結び、仏の世界へと誘います。この機会に是非とも優美な作品の数々をご覧ください。

〈日時〉10月10日(木)～10月16日(水)

午前10時～午後5時

〈場所〉高野山霊宝館　迎賓館

入場無料

○秋の茶会と書道展

霊宝館の展示をご覧いただいた方を対象に、高野山大学茶道部の部員が抹茶のお接待を行います。あわせて、書道部の書道作品を展示します。

〈日時〉10月19日(土)・20日(日)

午前10時～午後4時

〈場所〉高野山霊宝館　迎賓館

抹茶のお接待を希望される方は、霊宝館窓口でチケット購入の際にお申し出ください。

※茶会はお菓子が無くなり次第、終了いたします。

◎特別公開　お知らせ

○重要文化財・徳川家霊台内部を公開

〈日時〉10月12日(土)～20日(日)
午前9時～午後4時30分
〈場所〉徳川家霊台
（家康霊屋・秀忠霊屋）
〈拝観料〉２００円（通常拝観料）

厨子の上部組物近景

家康霊屋外観

家康霊屋内部の須弥壇と厨子

◎関西文化の日

11月11日(月)は「関西文化の日」に協賛し、霊宝館無料拝観日となっております。

◎特別公開　報告

●国宝・不動堂を公開

通常、不動堂は非公開ですが、昨年内部の特別公開をいたしましたところ、ご好評につき、本年も8月27日(火)から29日(木)にかけての3日間、特別公開いたしました。公開期間中、1770名もの拝観者が訪れ、興味深く建物内部の細部に見入っておられました。

不動堂内部

不動堂外観

見学風景

●ナイトミュージアム

4月29日(月)、6月11日(火)、7月17日(水)の3日間、開館時間を午後8時まで延長し、夜間特別開館を実施しました。霊宝館の敷地に入ると、展示棟に入るまでのアプローチには燈籠を設置し、いつもとは違うおもてなしの演出をいたしました。拝観者には、日中とは一際違う夜の静寂の中、文化財の見学を楽しんでいただきました。

お問い合せ　高野山霊宝館　ＴＥＬ ０７３６―５６―２０２９(代)

霊宝館の庭園

ヒノキ・檜・火之木・香柏

元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

ヒノキはヒノキ科・ヒノキ属の常緑針葉樹とされているが、葉は針状ではなく鱗状です。裸子植物の分類の松柏類の柏に属する高木です。

和名は、往時、この木の幹材を擦り合（会）わせて火をつくった（発火）ことによる「火之木」に由来するといいます。

現在は、桧・檜の字を慣用しているが、古い書物の松柏を、後の人がまつやひのきと読ませている例のごとく、柏の字が当てられていることも多く、別称や漢名として香柏・扁柏などもあります。

ヒノキに柏の字が当てられたのは扁平で緑・緑黄の光沢や芳香のある枝葉に饅頭や鯛などの鮮魚を盛り包んだので、それらの葉と食物の係わりにおける柏（カシワ）、赤芽柏（アカメガシワ）、朴柏（ホオガシワ）などの類例ではと思われます。

高野山塊には自生と植栽のヒノキがあり、霊宝館の庭園内にも植栽されています。

堂塔・寺院などの建築や修理には必要不可欠な樹種であり、高野六木のうちでも、特に、自生種の保護、植栽により優良木材を得ることのできる大径木樹造林に努め、高野山の記録に遺っているヒノキの苗植え造林の歴史は祈親上人（九五八～一〇四七）に始まるといわれ、今日に至っています。

今年の六月十五日には、高野山開創千二百年記念事業の一つとして再建されている伽藍中門の上棟式が行われました。その建築構造部主材は営々として高野山聖域内で育てられてきたヒノキの大径木によるものだそうです。現在は、ヒノキの皮を幾層にも重ねて屋根を葺く、檜皮葺きの工事がすすめられています。

『紀伊續風土記』には、高野山の産物として「檜笠」というものが紹介されています。要約すると、本名は高野檜笠であるが龍神笠ともいう。檜の幹材を薄くそいだものを組んだ網代笠で、径は三尺余りあるが、軽くて、色美しく、実に、みやびやかな趣のあるもの。となっているので、高野山と龍神の関係の方々に問い合わせたところ、現在は、製作する人も製品も絶えているとのこと。

近年、高野山の、ある店で販売されはじめた、桧材から抽出された水液、桧精油などを原材料とする入浴芳香液が高野山土産となっています。成分、効能、使用法などは商品の容器や添付別紙に詳しく説明されています。

十月八日は、木という字を分解すると、十と八となるというので全国各地の木材関係者で組織する民間団体が「木の日」と定めています。

枝葉と果実（毬果）

大径木の幹と枝葉

檜皮（ひわだ）